

回想の義勇隊船木山防空監視哨

佐々木政治（母 島 在 住）

石井 良則（小笠原歴史研究会）

要 約

母島沖村出身の佐々木政治（図1）は、昭和19年（1944年）の全島民強制疎開の際に志願して母島に残留し、義勇隊防空監視哨員として他の島民軍属とともに船木山に詰め陸軍の作戦に参加した。敗戦までの約1年間にわたる時期に起きた様々な出来事について、佐々木が回想し口述した談話記録を公開する。

I. はじめに

佐々木政治は7人兄弟の長男として、大正14年（1925年）3月6日に小笠原諸島の母島沖村に生まれた。父親は農業を営み、傍ら漁業や若い衆組合の庶務会計等に従事した。政治は沖村尋常高等小学校を卒業した15歳から南崎のくさや工場に勤め、夜は沖村青年学校



図1 佐々木政治、疎開先の四日市にて昭和21年（1946年）7月3日撮影。

佐々木政治所蔵。

に通学した。昭和 19 年（1944 年）7 月初め、家族は沖村役場から強制疎開命令の通知を受け取った。彼はこのとき満 18 歳だった。当時の佐々木家では父親が既に父島の海軍設営隊軍属として勤務し、実家には政治の他は母親と小学校高等科を卒業したばかりの弟以下 4 人の子ども達のみだった。長姉は父島大村の島民に嫁していたから、彼が島に軍属として残留した場合、唯一の年長男子になる弟が家族を伴い内地へ避難せざるを得なかった。そこで一家は政治を残して直ちに疎開船に乗船した。

一方 7 月下旬、最後の疎開島民を乗せた船が沖港を出る頃、政治は連絡を受けて母島駐留陸軍の下に編成された義勇隊漁撈班、農耕班、防空監視班の内の、防空監視哨員として船木山に配置されることになった。政治自身は回想記で残留を志願したとは明言していないのだが、結果として義勇隊軍属として勤務することとなった。船木山では奥本平太郎哨長の指揮下に集められた 6 人 1 組編成の計 2 組、合計 12 人の一員に組み込まれ、以後翌年の 8 月までそこを定位置として監視業務に挺身した。

奥本等の在郷軍人に適用されたと考えられる法例に陸軍防衛召集規則がある。これは小笠原に限らないのだが、防空並びに警備召集に別れて規整されていて、要するに国土防衛態勢を整備して大東亜戦争の軍隊と銃後の連携を図り、在郷軍人その他が一朝有事の際に軍に協力する必要があるという構想の下に、居住地域の人々が召集令状を受け当該地域を防衛するという内容の陸軍省令である。そこには第一、第二国民兵役の防衛召集が決められているのだが、小笠原では徴兵終結処分を経てない者、つまり徴兵検査を受けてない 15 ～ 16 歳の年少島民も軍に雇傭された。規則通り（東条英機、1942；内閣情報局、1942）なら年少者は防衛召集から除かれる筈である。しかし実際は母島では沖村 130 名、北村 48 名の島民が軍属として残留（大関、1995）し、その中に年少者（山田、1987）もいた。八丈島や青ヶ島、三宅島のように特設警備隊の臨時編成作業がある時期に行われた（山田、1992；小林、1980；浅沼、1974；段木、1976）のだろうか。

大関栄作は戦時編制に当たって、昭和 19 年（1944 年）の時点で母島では満 40 歳以下の男子島民を対象とした警備召集要員配当表が作られていて、それには村別、字別、階級別の人数や動員計画が記されていた（大関、1995）と指摘している。そうであれば、恐らく地区の軍司令官、要塞司令官等が召集担任官となって、小笠原支庁長を召集取扱者に指名して各村へ指示させ、兵事担当の役場員が各戸を回ったという形が考えられる。その際、防衛（警備）召集待命者名簿、大関のいう要員配当表のような資料に基づいて、事情のある者は応召しなくてもよいとか他の指示によって内地へ行き、志願できる者は残留させたということだろう。高等小学校を卒業したばかりの年少島民が雇傭された事情は分からないが、既に「兵力動員ノ余力乏シキ」段階（陸軍省、1944）であったから沖繩戦の鉄血勤

皇隊ように枯渴した兵員の代用として利用されたのかも知れない。

繰り返すが、こういった作業は昭和17年（1942年）9月26日に防衛召集規則が公布され10月1日に施行されてから実施され、先述のように伊豆諸島では特警隊（例えば八丈島、青ヶ島、三宅島）、八丈島民によって開拓された南大東島等にもそれが編成された（南大東村誌編集委員会、1990）。小笠原でも同時期に防衛召集待命令状が出されて在郷軍人等の登録が行われたと考えられる。ただ小笠原では特設警備隊にかわって義勇隊という名称が使われ、父島では労務、仲仕、漁業、農業班（高城ほか、1957；小笠原戦友会、1969）に、母島では漁撈、農耕、防空監視班にそれぞれ分けて編成された。後出する副島啓治陸軍大尉も特設警備隊とは言わず義勇隊、義勇隊漁撈班と明言している。この召集規則は敗戦まで6度改正され、直近時期では昭和18年（1943年）11月に改正された規則が同島に行われたと思われる（河合、2000）。

そして、昭和19年（1944年）6月15日の1回目の小笠原大空襲と続くサイパン島の日本軍玉砕を契機に、小笠原兵団長栗林忠道の意見具申に対する陸軍大臣の「健康にして戦闘に使用し得るか現地の自活のため使用し得る男子はこれを軍属として島に残し、それ以外は速やかに引き揚げしむべし」との返電によって、急遽島民の強制疎開が実施され、残留島民軍属825名が食糧補給部隊となったのである（石井、1967）。

ところで、標題を設定した動機は船木山防空監視哨の生き証人で、昔時を回顧できる人物として島内には最早佐々木政治が唯一人となってしまったことを知り、体験談を記録しておく必要を感じ、筆者が佐々木に依頼して採話したことが糸口になっている。これから綴る話柄は、佐々木が話し手（以後Aと表記）となり、石井が聞き手（以後Qと表記）となって縷述したものを書き留めたものである。敗戦から約70年経過しているので、例えば奥本平太郎や菊池定等の聞き取り調査（小笠原諸島強制疎開から50年記録誌編纂委員会、1995）と比較すると談話内容に幾らか記憶違いや聞き間違い、重複があるかも知れない。しかしながら、佐々木の談話を尊重して手を加えずそのまま記載した。採録した場所は彼の自宅で、概ね毎月2度ほど平日の14：00から約1時間の会話を石井が出向いて筆記し、これを平成26年（2014年）から翌年にわたって継続した。

Ⅱ. 義勇隊船木山防空監視哨員として

Q. 強制疎開の通知を受けた頃の家の様子はどうでしたか？

A. 沖村役場の浅沼順吉さんが知らせに来たと思います、たぶん。順吉さんが他の人々にも連絡したんだと思います。彼は課で、役場にあるでしょう？そこでそういった世話をされていて、後の話ですが、僕の母親や兄弟が早めに疎開船に乗ったとき、彼もすぐ同船して

内地へ行き、そちらで小笠原から引き揚げた人達の手伝いをしていました。軍事郵便で父親や僕が軍からもらった給料を送金したり、疎開先の島民同士が連絡したりするときの仕事などをしていたんだと思います。戦後、そのことを三重県の四日市市内に避難していた母親に尋ねると、確かに順吉さんから連絡があって、送金があったって聞きました。

疎開命令を聞いたときは家族は沖村の新町にいました。今の営農研の裏にあたります。僕は昼は南崎まで行ってくさやや鰹節作りの手伝いをし、夜は青年学校に行っていました。みんな内地へ行くんだということで支度をして、弟と艇で南京浜の沖に停泊していた疎開船まで布団とかの荷物を運びました。沖村は昔から連絡船が来ると、艇作業がありました。艇に人や荷物を載せて行くんです。艇は中はがらんどで5トンくらいの船でした。槽で漕いで走ったんです。手漕ぎです。疎開船に乗るときはふだと違って、艇はポンポン船に引かれて行きました。母親は既に疎開船に乗船していて、首を出して兄弟の作業を見ました。米を少しと衣服、お金をもって行きました。僕は本船に針金を巻き付けた布団を吊り上げるとき、右の薬指が引っかかって怪我をしました。その時の傷は今も残っていません。家族は第一回目の疎開船に乗ったんですが、その船が芝園丸だったかは思い出せません。違う船だったかも知れません。

疎開先はお袋の弟がその頃三重県の四日市にあった海軍の設営隊に勤めていて、家もあったのでみんな四日市へ頼って行きました。僕の姉やその嫁ぎ先の両親なども横須賀を経て行きました。僕や父親も戦後行きました。

Q. 防空監視哨は希望したのですか？

A. 役場の浅沼順吉さんが家々を回ってきて、島を守るんだ、残れる人は残って欲しいと言ってきました。その時は疎開の準備で村中がごった返しでした。僕は残りますって言った覚えがないんです。奥山武次さんが家に来た後で僕は義勇隊員として島に残るって自然に決まったんです。残るか残らないかは自分で決めることができ、志願制で強制ではありませんでした。事情があって残れない島民は内地へ行きました。知り合いの人も行きました。15歳から40歳までの男子島民は希望すれば残留できました。でも、僕は残りますって言ってないんです、確か。でも後で自宅にいるときに船木山に行けって言われ、行くと監視哨員だって分かったんです。15歳で高等科を終わった後みんな青年団に入るんですが、その時も入った覚えがないのです。でもいつの間にか自然に青年団員になってたんです。たいてい何も言わないうちに決まってしまうんです。青年団は15歳から20歳の兵隊検査までの人が入ってました。それから船木山に行く前に残る人はみんなロース奥で簡単な身体検査を受けました。

母島義勇隊の隊長は漁師だった奥山武次さんです。親戚でした。生きていれば100歳を越えているでしょう。兵隊を3年やってきた人です。それから再び召集されて陸軍伍長で帰ってきました。もう30代だったと思います。彼は青年学校で軍事教練を受け持っていて、僕等も習っていました。奥山さんが奥本平太郎さんと連絡したり相談したりして決めただろうと思います。奥本さんも沖村青年学校で教練の先生でした。戦時中は義勇隊の防空監視班長でした。疎開前に、その先生達と僕達は何度も吉兵衛山に登って防空監視の練習をしていたんです。夜間訓練もしました。一昼夜交代で、軍のやり方に倣って練習しました。奥山さんと普段からそういう関係だったから、義勇隊に残るときもいちいち言わない感じでした。それで僕は自然と防空監視班になっていたんだろうと思います。

夏の暑い日でしたね、船木山頂に集められたときに、そこに詰めていた奥本平太郎さんと一緒に監視哨勤務をやることに決まったんです。どうして自分が監視班なのか、どうして船木山なのかという経緯はよく知りません。さっきも言いましたが、たぶん青年学校で奥山さんや奥本さんと一緒に監視訓練をしていたので、自然とそうってしまったのだと思います。だから、防空監視を希望したわけではありません。船木山に集合したときに、奥山隊長が奥本班長とか僕等に向かって口頭でこれからここで仕事をするって言われて、その日から設営隊の作った山頂付近の宿舎から見張り台（展望台）に行って、昼夜交代で監視業務をすることになったんだと思います。

僕らの山には学校出立てで、3月に卒業したばかりの15歳くらいの子どものいる兄弟が3組くらいいました。僕と同姓の兄が一方の6人組の班長で、その弟が僕の班にいました。兄の方は僕と同じ年で相撲甚句が上手い人でした。同姓でも親戚ではありません。僕はこっちの6人組の班長をしていました。他にも親戚の兄弟がいました。義勇隊の本部は船木山の僕等の居たところの真下にありました。そこと僕等の宿舎を奥本班長はよく行き来していました。本部の書記だった兵隊帰りの稲垣行正さんや奥山隊長の世話をしていた剣下町の菊池輔君がいました。僕も時々行きました。稲垣さんは兵隊として内地に何年かいて戻ってきた人です。近衛兵です。菊池君は兵隊には行ってません。星さんは曹長で、評議平の軍の基地に勤務していました。兄弟が沢山いましたが、生き残ったのは星典さんだけです。

100名以上の義勇隊員がいたんでしょうが、僕は船木山の連中しか知りません。他の監視哨の連中は何人で誰が班長かも分かりません。そういうことは軍から何も言われませんでした。徳井さんが死んだのも知りません。軍は秘密にして一言も言わないんです。戦後弟が来て詳しく分かりました。あと休憩中、沖港に魚を取りに行くときに下山して出会った漁撈班の何人かとは話を交わしたので知っています。その他は誰が何処に行ったかは分

からないんです。勤務中にやたらに出歩くことは禁じられていて、魚を取りに港へ行くときは今の農業ダムの付近にあった野戦病院付近を通ったり、ダムに降りる手前の道を通ったり、幾つかあったんですが、遠回りなので、たいてい初めの二本の道を使いました。

漁撈班の本部はロース奥にあって、佐々木傳さんが班長でした。親戚です。漁撈班が船で行って姪島沖あたりで水揚げがあるとすぐ帰港します。姪島あたりに魚が沢山いました。船木山の方からよく見えるんです。そうするともうすぐ着岸するぞってということから、休憩中の誰かが取りに行きます。僕の際は港に着くと、知り合いがこっちへ来いと声をかけてくれ、軍の主計や炊事係が来る前に船尾から何匹か分けてくれました。時間がたつとあちこちから何人も寄ってくるんです。鰹やカンパチじゃあなくてアカバとかの小魚が多かったです。それも戦争が激しくなるにつれて出漁できなくなり、魚は貰えなくなりました。みんなが乗り捨てていった漁船はその頃は数隻しか見えませんでした。あとの船は何処に行ったのか分かりません。

Q. 船木山ではどんな仕事をしていましたか？

A. 一日は朝7時から始まります。24時間態勢で、僕が昼間の当番なら午前7時の朝礼で6人が整列し、交代の6人に対して敬礼をします。すぐに持ち場に行きました。夕方の7時まで勤務しました。先が見張り役が展望台の上に1人で立ち、その下に電話番が1人、計2人が詰めます。1時間毎に入れ替わり2時間で、次の2人組と替わります。だから最初の当番は7時から9時まで、2番手は9時から11時まで、3番手は11時から13時となり、13時から15時までは最初の当番の人達が4番手になりました。次いで5番手は15時から17時まで、6番手は17時から19時で、朝礼のときのように6人と交代の敬礼をしてから夜の当番に替わりました。

手が空いている人が炊事当番になって食事を作ります。煮炊きする時間は決まっていた。ふだんは火が使えないんです。何でも6人で行動しました。雨だろうが風だろうが油紙みたいなのを身に付けて任務に就きました。見張り役は展望台に登りました。裸の双眼鏡と望遠鏡があって性能が高く遠くまで見えました。敗戦後はそういうのはぜんぶ沖の方の海中に捨てました。あちこちに捨てたんでしょう。重くて運びにくい大砲とかはその場所に残し、機関砲とかは浅瀬に捨てました。海軍は静沢の方においてやはり大砲がありました。その奥の方に海軍通信局があり、友達横田民雄がいました。

展望台には屋根がなく低い縁が付いてるだけで、大きさは自分が住んでいる、このハウスくらいの広さがありました。これが船木山の山頂に築かれていました。吹きさらしです。そこで監視を続けました。苦しいと思ったことはなく、命懸けでね、死ぬ覚悟でいつも緊

張して仕事をしていたので大変な勤務だとは気付きませんでした。病気をした人もいません。ただ空腹だけがつらかったです。

電話の場所は展望台の真下にあり、蝸壺のような穴が掘ってあって囲いがしてありました。そこにずっと座って電話番が出来たので少し楽でした。壁掛け用のダイヤル式の電話です。グルグル回して受話器を取るとすぐ通じました。それから急に本部に電話をかけたり本部から指示がありましたから、居眠りなど出来ません。敵機来襲や艦船発見などのときは、展望台の当番が言う声を聞いて電話で船木山監視哨、船木山監視哨って言って、向こうが出るまで続けます。だんだん慣れてくると、ただ船木山、船木山っていうだけになりました。本部の電話を受け取る人も順番がありました。船木山監視哨、ただ今敵機何機、艦艇何隻って報告しました。監視哨は義勇隊の他に軍の監視哨もありました。敵機侵入の報告を本部と交信していると、色々な監視哨からの報告も聞こえました。だいたい船木山監視哨と同じ内容でした。乳房山にも北村にも南崎にも、それから山でなく平地にもあったと思います。みんな陸軍の本部に繋がっていました。内地から運んできた杉の丸太に電線が通してあって、今も電信柱が何本か残ってるかも知れないけれど、それが全部本部に行っていました。軍の本部は今の見廻山の方にあっただです。こっちから行くと農業者のやってる畑の近くの平たい所があるんですが、後ろに大砲の陣地があって、以前若澤さんがいた所です、そこにありました。軍に入るとき、僕等は隊長とかが使う家の屋根作りの仕事に行ったことがあります。疎開前です。渋谷隊長とか副島大尉とかの将校がいました。副島さんは大竹っていう名前でした。渋谷隊長は今の旧ヘリポートの所に居て、その後見回山の本部に行きました。その本部には一日の出来事を報告するため書記だった稲垣行正さんが毎日出掛けて行きました。何時だったか、隊長と副官の副島大尉が船木山まで馬でやって来たことがあります。あんな高い所までよく馬で来たなって思いました。そのときに全員に栗饅頭を配ってくれました。こんなのが未だあるんだと思いました。焼いて食べました。それから隊長は乳房山の方に出掛けたと思います。道とかは草木で隠し敵機に見せないようにしました。だから木は切りませんでした。銀合歡はありません。他の草木で覆われていました。

勤務交代のときになると、6人が勢揃いして次の6人組に向かってグループの班長が代表して敬礼し、みんなもしました。他のことはしません。当番は直ちに勤務を始めました。僕は6人組の班長でした。稲垣兄弟がいました。その一人は今父島にいます。イナガキカズミです。他にササキヨシアキ、イナガキミキオ、オオタニタカノリ、キクチヨシマサがいました。もう一方の6人組の班長がササキヨシオで、ヨシアキの兄です。カズミの兄のイナガキマサミもいました。キクチテルカズはヨシマサの弟です。

朝礼は必ずありました。勤務中、敗戦間近の頃になると何となく敵機は遊び半分で攻撃しに来たとしか思えないように感じました。昼来たりたまたに夜来たりしてね、昭和 20 年の頃はこちらには飛行機も船も何も無いんだから。何の抵抗もしませんでした。反撃などしたら敵に陣地を知られ攻撃されるんですから。おとなしいもんでしたよ。

野戦病院は母島では玉川ダムのここ一つだけで、他の陣地から病人が集まりました。初めは村中にあったんですが何時かここに移りました。僕が見たときは小屋みたいな所に注射器やアンプルが結構ありました。空腹なので胃の病気が多かったようです。普通の民家みたいな所で設営隊が拵えたんですが、そこにいる病人はほとんどが栄養失調で、力尽きて洗濯とかもしてないようでした。ブリキの入れ物なんか木に根みみたいなのを煮て、里芋みたくのを入れて啜っていました。配給が無いんです。長期戦になるって言うんで少ししか食料をくれないんです。パパイアの白い根っこ、何となく水芋の味に似ているけれど、内地から来た兵隊は食べていましたが、島の者は食べません。病院のそばにちょっとした滝があるんです。そこに弱った人がいました。

農耕班は各地にバラバラになって野菜類を植えていました。早く育つものを植えました。南瓜も植えたけれど、ピンポン玉くらいになったばかりなのにつまんで持って行って食べられてしまうんです。僕等も似たり寄ったりでした。病院の近くには水芋の群生地があって、よくそれを取りに行きましたが、次第に他の人も来るようになり、ついに無くなってしまいました。

Q. 敵機が来たときはどうしましたか？

A. 灯火管制は無かったけれど、火の使用はやたらにできないんです。食事のため煮炊きする時間になると何故か 2～3 機編成で、また 5～6 機の時もあったけれど、姪島や硫黄島方面から敵機が来襲してきました。南の方を見ているとだいたい分かります。もちろん妹島や姉島、向島からも来ます。そのうちに爆音ではっきり分かります。すると、非番の連中も山頂に登ってきてワイワイやってるんです。一番狙われやすい位置なのに何故かみんな集まってきました。そして、グラマンとかの場合は機銃掃射で、それに撃ち込まれるとしゃがんでやり過ごすんです。敵が侵入して撃つてきてもよけるために動き回るな、余計に当たるって言われました。それから朝鮮帰りの兵隊は動かずに止まっていた方が安全だって言っていました。爆弾は B29 です。そのうち奥本隊長もやってきました。もっとも一人で宿舎に居るわけにもいかないでしょう。

奥本さんはたいてい僕らの寝起きする宿舎にいつも詰めていました。日誌とか書いていたと思います。僕等は書きません。稲垣行正さんが義勇隊本部の書記で、奥本さんといつ

も連絡を取り合っていました。陸軍の本部に毎日出入りして、本部からの指示を奥本隊長に伝えていました。奥本さんは遠州町で漁師をしていましたが、義勇隊に残りました。他にも兵隊帰りの人が居たんですが内地へ行きました。僕等が非番の時に奥本さんが飛行機が何種類も写っている本を持ってきて、それを使って形、色を比べて勉強しました。どれが何型の軍艦で、プロペラが2つ、4つあるからこうだとかびっちり仕込まれました。音が違うとかコンソリ型だ、B25は胴体が2つ、救助専門の飛行艇はこういう音で来るとかです。潜水艦や軍艦は載ってませんでしたが、敵の軍艦の形などは教わりました。潜水艦が分かりにくかったです。殴られはしませんでしたけど厳しかったです。現場視察もありました。奥山隊長が来て服装検査とか勤務の様子を見るんです。

一度、内地から表彰状が来ました。母島のB29来襲のときにいち早く本部に通報したからでしょう。早朝に復路のB29が飛んできたんです。いつもと違って、飛行機の胴体がピカピカと光っていて、北村の方から侵入して来ました。それから爆弾を投下したんです。敵機の胴体の下の方が開くのが見えました。爆弾が落ちてくるのも見ました。それを直ぐ本部に報告しました。北村上空でB29の胴体から爆弾が落ちると、ちょうど沖村周辺に落下してくるんです。東崎に落ちたのを見ました。大崩れや石門にも落ちました。海に吸い込まれるように爆弾が落ちました。耳塞げって言われます。物凄い爆破音がするんです。大崩れの方に爆弾が落ちて破裂したときは魚がたくさん浮きました。すると後で北村の方から上陸用舟艇が出てきて浮く魚を回収していました。舟艇は鉄船で、海岸に着いてもそのままスーッと上がれるんです。東港にそれがありました。こちらからよく見えたんです。みんな腹ぺこだったときに魚を拾っていたから羨ましかったです。

また一度、南京浜に低空で入ってきた敵機が傘付き爆弾を機体から落としたのを見ました。初めて見ました。その爆弾は機体から離れると同時に落下傘が開くんです。飛行機が上から攻めてくるか下から来るかでまた攻撃の仕方が違うんです。それに遠くの飛行機は高空で飛んでいるんですが、ここから見ていると低く飛んでいるように見えました。それから潜水艦が来ていて、こちらの反撃で敵機が向島の近くに不時着したときはそこにスーッと寄って来ました。潜望鏡にパイロットをつかませて島の裏に運んでいくと、水上艇がサッと救助してしまいます。速くて手際よいんです。こちらが捕虜にしようとして船を出す前に救助するので手が出ないんです。スムーズでした。支那事変に参加したことのある古参兵が、見廻山の方から撃った砲弾が敵機に当たったときにも山から見えました。B29がやられて海に墜落して搭乗員が海に浮かんでました。直ぐ救助されました。防空監視哨は空だけでなく海も監視しました。

何時だったか、向島の後ろの方に大きなカヌーが1隻来ていて、どうも硫黄島の方から

逃れて来た兵隊だと思っただけけれど、その後、その兵隊達は怎么样了か分かりません。カヌーでも北硫黄島あたりのカヌーは他の島のものより大きいんです。あの頃はもう船なんか無いでしょう。北硫黄島のカヌーで来たんだな。僕達がそれを見つけたんです。あの頃、硫黄島の方からパカッパカッという砲撃の音が聞こえました。夜になると光がピカッピカッて見えました。

初めの頃ですが、朝方から艦砲射撃が始まって、霧の晴れ間に向島辺りで軍艦が一列に並んでいるのが見えました。沖村全体に砲弾が飛んでくるんです。それは最初に偵察機が母島の上空をグルグル回って様子を艦隊に知らせます。偵察機が去ると、艦砲射撃が始まりました。偵察機の情報をもとにして撃ってくるんだと思います。砲弾が小剣に当たりました。探照灯は北港と剣先山の裏道のところと二箇所にありました。凄く明るいです。一度見ました。でも実際は役に立ちませんでした。

漁撈班は敵が来ると海に飛び込んで逃げました。逃げるのは海しかないんですから。泳ぎはみんな達者ですが、漁に出るのは本当に命懸けなんです。僕等の監視哨も敵機から丸見えで、何度も機銃掃射や爆弾を投下されましたが何とかみんな生還できました。

魚が比較的が多い姪島周辺で、漁撈班が操業していると敵機が来て銃撃します。グラマンが船上を目がけて機銃掃射をします。船頭以外は全員水中に飛び込みます。潜って逃げるんです。船頭は操船しないといけないし、飛び込んだ連中を掬い上げないといけないから体にロープを巻いてから飛び込みます。敵機が去ると船頭はロープをたぐって上がり、船を操縦してみんなを拾い上げました。

敵の機雷も浮かんでいて、昭和 19 年に最後の補給船が港近くに来たときは機雷に触れて沈没しました。B25 っていう型の敵機が落とした機雷は大体 5、6 発ですが、海流で運ばれて行くんです。その輸送船は 3000 トンくらいでしたが、港に入る時にやられました。監視哨からよく見えました。敵は機雷が流れて行ってしまう時間を知っていて、また落としに来るんです。機雷には 2 本くらいの角が海上に出ていて、それに触れると爆発しました。

Q. 空腹がつらいと言いましたが、食事はどうしていたのですか？

A. 食事は任務に就いた初めの頃は米がちゃんと軍から配給があって、いや米だけではなく、靴、帽子、下着、陸軍兵の制服も全部支給されました。靴は登山靴みたいな頑丈なもので、それを脱いで毛布を敷いて休みました。服も冬用と夏用のをもらいました。背囊も、毛布も 2～3 枚。宿舎に布団はなかったから、それを丸めて枕にしたり、布団の代わりにして掛けて寝ました。

後で聞いた話では、陸軍と海軍は食料も服も、装備が全然違うんです。海軍の方が良い

んです。父親が海軍の設営隊だったから、ご飯の他に汁粉とか食べたって言ってました。帽子だって陸軍のは茶色のつばのあるもので、首の後ろに日除けの布切れが付いてました。何となく野暮ったいんです。海軍のもそうでしたが、白くてね、つばの無い丸くて何とか海軍どこそ隊っていう字が入った帽子です。碇のマークのね、かっこいいんです。今被っている帽子は海軍のですが、写真（図1）にもあるように以前東京で買って取り寄せた帽子です。母島の海軍は今の脇浜の方です。海軍部隊が静沢の方に進駐してきて基地を作ったのは、僕が高等科を出る頃です。女子青年団は海軍の鉄砲磨きをしていました。僕は15歳だったから若い衆組合に入りました。若い衆組合には農業や漁業の仕事に就いてない者が入りました。兵隊検査まで若い衆組合です。母島の人はたいてい陸軍です。

それから食糧は一袋一食で、高野豆腐入りの乾燥味噌、乾パン、金平糖があって、沢の水で味噌汁を作って毎日三度食べました。野菜とかの具が入っていたかは思い出せません。おかずもあったと思いますが思い出せません。缶詰を食べたかな？一度、海軍の乾パンを食べましたが、陸軍のように小さくないんです。大きくてとても美味いんです。それから、漁撈班の魚が時々入手できました。チギとかアカバです。監視哨の近くに普通の畑じゃないけれど、何か植えてあってそれも食べたかも知れません。ほら、監視の仕事をしているときにちょっと植えただけの、世話なんかできないし、畑作りなんか無理なので、そういう具合の所です。

硫黄島の戦闘が始まる頃になると、軍の本部から長期戦を覚悟して食事制限をするという連絡があって、食糧の支給が減りました。それまで少しためていた米と乾パンとを交互に食べて節約していましたが、それらも少なくなっていく、ついに尽きて無くなりました。硫黄島で激戦が始まると、もう危険で漁撈班の仕事も続けられなくなりました。新鮮な魚介類はもらえなくなったんです。煮炊きする水を探しにいくときに何か木の実や他の食べられる物を見つけようとしたんですが、やたらに動き回ったりして時間をつぶせなかったので探せませんでした。初めの頃は船木山付近に誰の畑があって、何が植わっているか島民ならみんな知っていましたからそれらを時々持ってきたり、沖港に下ったときの帰りに防空壕に保管していた物資を持って来ることもできました。それから、農耕班から何かもらったかも知れません。

そのうち空腹でつらくて立っているときもフラフラで歩けません。だるくて動きがのろいんです。動くのがやっとなで、米も来ないし僅かな野菜も無くなって皆に渡らず、サトウキビも消え、ですからみんな栄養失調です。島を守るという気持ちで残留しましたが空腹では戦えません。終戦があと1～2ヶ月伸びていたら僕も確実に餓死していたでしょう。島の兵隊は何千人と居たんでしょう？ その兵隊も百姓をやって菜っ葉や大根を作ってま

した。

敗戦がハッキリすると、軍は貯蔵していた米をどんどん放出したから、僕等はギンマイだ、ギンマイだって言ってじゃんじゃん食べました。塩おにぎりにしたり大崩れに出て魚を取ったりして、アメリカ軍が進駐する頃まで、僕は思う存分ご飯を食べました。魚はどの辺に多いか知ってたし、そういう所で漁をしました。爆薬を使って取りました。とにかく配給が増えたのが有り難かったです。米俵は船木山のテントに積まれてあって、衛兵が二人で見張っていました。夜も不寝番がいて監視していました。そこに軍の係が来て米を受け取り、部隊に配られました。その頃に戦争が終わったってアメリカの飛行機が来てスピーカーで言ったんですが、謀略だろうと思って信じませんでした。でも、特務機関の安田陸軍中尉が山に来て僕等と会いました。そうすると日本は戦争に負けたって分かって、それからです、配給米が増えて来たのは。安田中尉が直接僕に負けたって言ったんです。

食事で思い出しました。防空監視哨の櫓の横に電波塔を立てて敵の通信傍受をしていた、さっきの特務機関員の安田隊長は立派な体をしていて兵隊の何処にも所屬しないで、武器も何も持たず、精巧な通信機器や電波探知機で知った敵の情報を味方の軍にいろいろと連絡していました。敵機が何処にいくらいて敵艦や敵潜が何処へ向かっているとかかです。僕等にも教えてくれました。硫黄島にどんな軍艦がいて敵機が何機で攻撃しているとかか、いろいろな情報をいっぱいもらいました。あの人達は陸軍の特務で中野学校の人かも知れない。

安田隊長は僕等にいろいろご馳走してくれました。大きな食糧袋を持っていて、1メートルくらいあったかな、水枕みたいなゴム袋にいろいろな品物が入ってました。何処から補給しているのかわかりません。濃縮した食品や一日分の食品とかありました。お湯を入れたとたんには餅が出来るんです。電波塔で受信して何時もアメリカ軍の暗号を解いたり何処かと通信したりしていました。5人くらいのグループで、国籍が分からないようにした普通の服装でみんな若そうでした。一人だけ僕等と同じ10代の人が居たけれど、だいたい年上で安田隊長は24～5歳かな？ 八丈島出身の人がいました。他に愛知県の人もいました。その人達が安田中尉って呼んでいました。

安田さんは戦後、我々が母島へ帰還した直後でしたか、昭和46年頃に欣生に泊まって直ぐ帰ったそうです。後で欣生の人に聞きました。何か取りに来たのかな。副島大尉が来た時は稲垣さんと僕が案内しました。僕が運転して中之平の陣地だったところ等の島内各地に行きました。車で行ける場所です。安田さんは色々な情報を知っていたと思います。みんなに会えばいいのに誰にも連絡しませんでした。会えば何か分かったかも知れません。安田さんに横井っていう部下がいました。僕等が四日市に引き揚げたとき、横井さんは愛

知県の人だったから会いに行きました。懐かしくていろいろ話し合いました。農家でしたが保育園経営もしてました。連絡先も置いてきました。生きているなら95～6歳でしょう。

Q. 青年学校で防空監視の訓練をしていたのですか？

A. 青年学校は夜間にありました。午後6～7時頃から2、3時間くらい、男子は教官だった奥山さんや奥本さんから軍のことを色々教えてもらいました。校舎は沖村小学校で、軍事教練は校庭でしました。木製の銃を担いで徒步行進をしたり突っ込みの練習をしました。僕のクラスには20名くらいの人が出て、他にも上級生や下級生がいました。男ばかりです。ランプやカーバイトとかに照らされた教室で、教官が書いた黒板の字を読んだり、話を聞いたりしました。教科書はなく、ノートもなかったと思います。書き留めた記憶が無いです。役場の裏側に昭和16～7年頃かと思いますが、製氷工場が出来て、その電気で村全体に電気が点いたけれど、たいていランプの下で勉強しました。

兵役に就く20歳の頃になるとみんな青年学校を卒業しました。僕は兵隊に行く前の18歳で義勇隊に行ったから青年学校はそこで終わりです。卒業証書は無かったように思います。僕達の世代はみんな討ち死に覚悟で義勇隊に志願しました。希望制だったから内地へ行った者も沢山いました。僕の親父は父島のトンネルの所にて設営隊の仕事をしていて残り、長姉の夫とその弟も父島に残りました。夫の父親は女子どもを連れて内地の四日市に避難しました。

青年学校に行く頃は、僕の場合仕事で、だいたい毎朝3時頃に起床して前浜に行きました。そうすると既に漁師が沢山集まっています。そこで南崎方面に行くポンポン動力船を見つけて、僕の乗る帆掛けのカヌーを引っ張ってもらうんです。引っ張ってもらうと30分で南崎に着きましたが、櫂で漕いでいくと2時間はかかりました。くさや工場は南崎にありました。ポンポン船に引かれていても途中で魚の群れを見つけるとカヌーは引き離されてしまうので、後は自分一人で漕いで行くことになります。時々前田定さんを乗せました。くさや工場は定さんがやってました。雨の日や波や風がある日は陸路で行きました。昼間はずっと青ムロとかムロアジの開きを作ってくさやを作りました。伊豆の新島から来た5～6人の女の人達と一緒に仕事をしました。新島の方は上手でした。くさやは木箱に300枚くらい収めてみんな内地に卸しました。夕方4時頃になると僕はカヌーで村に戻りました。それから青年学校に通うんです。夕食を直ぐに済ませて行きました。仕事が終わった後なので眠くて仕方がなかったです。何時もだいたい小学校高等科の教室で勉強しました。社会常識を習いました。勉強が終わると直ぐ寝ました。その繰り返しでした。

前にも言いましたが、軍事教練のときは徹夜で斥候訓練もしました。真夜中に蝙蝠谷とかへ2人一組で斥候に行くんです。深夜であっても道は白く光っていて歩きやすかったです。地下足袋を履いて行きました。寝静まっているので戸外に人は居ません。船木山で訓練したこともあります。1～2回やった記憶があります。防空監視訓練もしました。土日は休みだったような気もしますがはっきり思い出せません。

Q. 防空監視中に何か気付いたことはありますか？

A. 監視哨に立ってから暑いときも寒いときも、僕等はだいたい村に降りないでずっとここに居ました。暑いからって行って上着を脱いだりできません。ずっと着たまんです。沢の水で洗濯はしました。一度非番の時に村に戻って自宅を見ましたが、柱や屋根とかみんな何もありませんでした。村は焼けてないのにこうだから、たぶん陣地を作るときの材木として、設営隊が全部持って行っちゃったんじゃないかな。設営隊は家を建てるプロだから木材は綺麗に持って行ってしまったんです。洞窟内に家を建てて陣地を作っていたので、それ用に村内の家々は壊されたんです。石門に行く途中に丸山ってところがありますが、そこに焼夷弾が落ちました。でも、村には落ちなかったから家は燃えて無くなっただけじゃありません。やっぱり軍が持って行ったんでしょう。兵隊の宿舎用に使われました。防空壕の中に家を作ったと思います。僕達の船木山監視哨の宿舎にも使われていたかも知れません。そこは寝泊まり出来るようになってました。30坪くらいの広さだったと思います。家の材木は持って行かれましたが、お酒とか他の食料は何処にあったか知っていたので、それらの置いてある壕に取りにいて使いました。

何時だったか向島の方に敵艦が14隻もとまっているのに、西浦のマルヨンが打って出ないからがっかりしました。マルヨンって震洋のことです。僕等は震洋とは言わずマルヨンって言っていました。それで爆薬を使わずにあそこに踏ん張っていても意味が無いと思いました。マルヨンはベニヤで出来ていて未だ敵が余り来なかったとき、えらく速いボートが沖港の海岸にやってきたことがあります。島民が全員内地へ行った後です。何もすることがなくてただやってきたんです。遊びじゃないの？普段着でやってきましたね。あの人は若いなりに年はいってる方でした。マルヨンの連中は西浦から来ました。それで僕も見に行ったことがあります。木で作ってあって一人乗りで軽くて速かったです。でも、敵艦が目の前にいた時なんか何時発進するかって思っていました。一度も一隻も出ないんです。あてが外れました。敵だってベニヤのボートだった震洋でも、その基地がある西浦には恐れていたのか余り近付きません。しかし、マルヨンの方は名前は立派だけど居てもいないようなもので、敗戦後に貯まっていた爆薬を爆発処理しているのを知って呆れました。

特攻部隊でもたいしたことはなかったです。

山と山の間を飛んでくるアメリカの飛行機を間近で見ていると、機銃掃射をするときにはパイロットが何となく前のめりで弾を撃ってるように思いましたね。船木山からよく見えました。空襲は夜は余り来ませんでした。でも空襲があるときは爆弾も落ちてきて、墓に当たって大穴があきました。墓石なんか吹っ飛びました。見廻山の大砲や小剣の方には艦砲の砲弾が飛んできてやられました。大剣の方には余り来ません。味方の大砲陣地は敵から丸見えでしたから狙い撃ちされました。毎日決死の覚悟でやっていたから夜間の勤務はつらいとは思わなかったけれど、今から思えば厳しいものでした。夜に海を見ると明かりが見えるので船がいるって分かります。青年団の頃から飛行機や艦船の種類や形を習ってましたから、見ればだいたい敵のどんな船かは分かりました。

Q. 戦争に負けたことを何処で知りましたか？

A. 8月15日の朝、特務機関の安田さんが来て、今日は天皇陛下の放送があるって言いました。でも、僕等のところにはラジオがないので聞けません。そのうちに硫黄島の方から飛んできたアメリカ軍の水上艇みたいな飛行機だったと思いますが、グラマンとかでなくて、その飛行機が母島の上を円を描くように1回か2回かな、大きく回りました。そのときハッキリした男の人の声で「戦争が終わりました。」って言いました。スピーカーとかの声でした。2世の人の声でしょう。でも、それが天皇の放送の前に来たのか、放送の後で飛んできたのか、よく思い出せません。

その頃、安田さんは僕等の宿舎と監視哨本部の間にて、いくつも部屋のある宿舎に住んでいました。部屋には通信機器がいっぱいありました。監視哨の脇に建っている電波塔をいろいろ動かしてました。敵の飛行機と軍艦の様子を調べていました。そこからいろいろな情報をキャッチしてました。硫黄島とかと交信してました。そういう時は非番の僕等はたまに仕事を手伝いました。機械をグルグル回して発電する手伝いです。安田さんは僕等のところから2分くらいの場所にいました。すぐ近くなんです。安田さん達は僕等が船木山で監視の仕事をしていた時より少し後になってから来ました。4～5人で来て住んだんです。

戦争が終わったことはそのときは分かりませんが、空襲が無いことからおかしいと思ひみんな展望台に行かなくなりました。宿舎から20メートルくらい先に展望台がありました。敵機が来ないので船木山の周りを歩き始めて食料を探しに行くようになりました。

アメリカ軍はワントネの方から東港に入ってきたのかも知れませんが、大崩れの方からなら、こっちから見えますが見たことがないので。義勇隊員だけは11月にもう内地に帰れた

ので、僕等はそれまでに船木山から大崩れに下りてダイナマイトで魚を取りました。山に帰ってからみんなでご飯と魚を貪り食べました。戦争が終わったことがだんだん分かってきて、軍から米がどんどん配給されて来たんです。安田さんが敗戦を知らせてくれました。この人達は早くから日本が負けそうだって知っていて、僕等が内地へ戻ったずっと後まで母島にいました。どうやって内地へ戻ったのか知りませんが、安田さんだけ戦後早くに母島に来ました。誰にも会わずに帰ったそうです。副島さんも来ましたが、僕等が島内を案内して、副島さんの本をもらいました。

Q. どういうふうにして内地へ戻りましたか？

A. 11月に月ヶ丘神社に集まりました。その頃の境内は今の3倍くらい広くて、社や昔の家が建っていました。泊まれる家がありました。そこに義勇隊のみんなが一泊しました。翌日、そこから歩いて北村に行き小学校に一泊しました。それから東港に呼ばれました。アメリカの軍艦が停泊していました。アメリカ兵が並んで上から見張っている道を通って、背囊検査をしました。刃物とか危険なものはそこで取り上げられました。僕は親父が作った短刀と家に昔からあった日本刀の古刀を取られました。誰かが島桑で作った黒い箸も取られたって言ってました。箸は危険というより珍しいから取られたんだろうと思います。それから、日本語で名前を呼ばれました。僕の名前をちゃんとササキマサハルって言いました。たぶん2世の人でしょう。日本語で呼ばれたので一瞬あれ？っと思いました。ぜんぶ持ち物検査が済んだら、上陸用舟艇だったと思いますが、みんなそれに乗って沖にいた日本の駆逐艦の楓に乗りました。確かカエデだったと思います。この船は戦前一度沖港に来たので覚えています。

その時までも僕等が安全に内地へ戻れるという気持ちはなくて、東港に集められたときはここでやられるんじゃないか、乗船しても海上で処刑されるかも知れないって思っていました。一日で久里浜について、岸壁に島の人の顔が見え勝男の顔を見たときに助かったと思いました。上陸する前に看護婦が来て殺虫剤を僕達に振り掛けて消毒しました。僕等はおお、女だと言いました。1年間以上女を見ませんでしたから。消毒検査が続いたので上陸が少し遅れました。港には島の人が沢山いました。近くの宿で一泊し弟と横須賀を経て家族のいる四日市に行きました。

10体の義勇隊員の骨が船木山に埋葬されたって知りませんでした。行正さんが軍と相談して決めたと思います。後から分かったんです。10体のうち漁撈班の傳さんは知っていますが、2、3人知らない島民のがありました。どの班の誰が死んだのかは分かりませんでした。軍は何も知らせないんです。

Ⅲ. おわりに

平成4年(1992年)に刊行された副島啓治の著作から、母島における義勇隊防空監視哨の関連記事(副島、1992)を探ると「七月十八日島民最後の退島、七月二日第一次、十五日第二次、本日を以て義勇隊として十五歳以上の青少年が監視哨要員および漁撈班として軍属の立場で残留し、他は全員郷里を離れることになった。私の配下に乳房山監視哨員として沖山青年以下十数名が献身的に協力」したと記されている。また「七月二十日船木山および乳房山監視哨を巡察する。乳房山は本島の中央にある一番高い山で、少年監視隊員は三名交替で勤務しているが、木の根元に深い壕を掘っていて、底は広く、危険を感じたら、竹竿をすすする降りて待避」する様子を述べ、「すでに六ヶ月もこの勤務をしていたので、米軍用機および艦船の識別、および報告はよく訓練されている」と言及している。

副島陸軍大尉はこの著作を書くに当たって、母島勤務中につけた軍隊手牒の記録を参考にしている。手牒に乳房山監視哨を査閲した際、先述のように築城教範にも無い少年達の創意工夫がある、四方拝に列している将兵と乳房山、船木山監視哨の澆刺とした少年達の顔つきが違う等と記し、また白帆をあげて平島を航行する義勇隊漁撈班の漁船が見えた、漁撈班が妹島で救助した第二興洋丸機関長村山庄平より遭難時の事情聴取をする等と書き留めている。

彼は旧姓大竹、大正7年(1918年)生まれで、陸軍歩兵一等兵からたたきあげて昭和17年(1942年)中尉、更に20年(1945年)に大尉と累進した。母島着任時は昭和19年(1944年)7月11日、母島陸海軍の統合指揮権を掌握する政木均陸軍混成第1連隊長隷下において小笠原兵団母島地区隊本部情報主任として勤務し、敗戦後は米軍との折衝を担当する連絡将校の任務に就く。母島では初め評議平防空司令所に入り、後に見廻山の陸軍本部に移動して島内外の情報掌握に努めた。副島の主任務の一に防空監視情報の分析があった。ここから義勇隊防空監視哨員との直接の関係が築かれ、著作では主に乳房山と船木山の2箇所の島民監視哨の思い出が書かれてある。

以下、引き続き関連記事を拾うと「昭和二十年一月一日、午後は船木山の監視所少年監視隊員を激励に赴く。」とあり、そこで彼は糖酎や漁撈班から得た魚等の正月料理によばれている。次いで「四月二十九日義勇隊監視哨を巡察する。十二名の少年達は空襲もなく、天長節の祝日であり、天気は春麗らにして元気なり。奥本哨長は海に降りて、自ら捕獲した一貫匁もあろうかという烏賊を刺身にして全員で天長節を祝う。」とあり、逆に副島が激励されている。5月3日の日誌では「全島十カ所の監視哨の巡察教育を終わる。」とあるが、既述のように2箇所が島民義勇隊の哨所で他は各部隊のものかと思われる。電話連絡の確認と連絡できない場合の措置方法が巡察目的で、その日は雨中に石門と乳房山監視

哨の教育が実施された。

また同月 24 日には、船木山の哨員とも馴染みのある、陸軍中野学校出身の特殊諜報勤務将校安田陸軍中尉の情報を得るために政木大佐と副島が母島属島に赴くとあり、そこで安田から残置諜者の任務等を聞いている。かつて副島はグアム軍事裁判取材のため代々木の副島塗装店を訪問した筆者に、特務機関の若い陸軍少尉が単独で姉島にいたと語ったことがある。恐らく安田中尉の拠点はそこで、船木山の施設と往来していたに相違ない。ただ大関は『母島戦争小史』で安田の他に 2 名の残置諜者がいたと言明しているので断定はできない。安田の任務が通信傍受にあったことは回想記に述べられているので疑えないが、果たしてそれのみであったのだろうか。彼が船木山にあった義勇隊本部と防空監視哨本部間近に拠点の一を置いていたことや船木山の少年哨員達と親密で自身の通信施設に出入りさせていたこと、あるいは電波探知塔を見張り台脇に設置して傍受した戦闘状況を知らせたり、貴重な食糧を色々と分与していたりしていたこと、更に小笠原返還直後に訪島しながら在島していた元監視哨員達に会わずに帰京した点等が触れているが、それらは別の意図、例えば決号作戦のような国内抗戦を想定して（陸軍省、1945）義勇隊に不断に何等かの働きかけをしていた動きと考えられないこともない。副島は上官と一对一の密命で派遣されてきた安田を我々の部隊と別系統の情報将校であると述べている。別系統は別作戦と読み替えてもよいだろう。その別作戦の一が義勇隊、特設警備隊等の「在郷資源」を投じて「侵攻米軍に対し遊撃、偵諜、偽騙、宿営妨害等のゲリラ行動」を取る戦術工作（陸軍省、1945）であったかも知れないという推測は的外れだろうか。ただ確たる裏付けが得られない現在ではこれ以上何とも言えない。

またここでいう特務機関とは中国大陸に置かれた諜報謀略機関ではなく、元帥府、侍従武官府、あるいは大公使館付陸軍武官等のそれでもない。安田が陸軍中野学校本校や二俣川分校に在籍し、軍事諜報、秘密戦、遊撃戦要員として残置諜者の訓練を受けたかも知れないという特別な事情から仮に特務機関員という語が使われていると思われる。中野学校自体は秘密の存在で、戦後徐々に一般に知られるようになった。

敗戦間近の 6 月以降は監視哨関連の記事がない。軍恤兵部が発行したポケット用日記の手帳メモは 5 月末日で途絶えているからである。以後は自身の記憶を辿りながら 8 月 15 日の玉音放送、9 月 10 日の東港連絡事務所、同月 14 日レキシ-大佐との交渉、昭和 21 年（1946 年）1 月 3 日の占領式と書き綴っている。義勇隊に遅れること 2 ヶ月、1 月 11 日に副島は政木と共に内地の浦賀に帰還（副島、1992; 東部復員監部、1945）した。

最後になるが、母島には現在、戦前 10 代、20 代で戦時体験をした人はかぞえる程度で実は殆どいないと言っていいかも知れない。これは父島も例外ではない。実戦経験をした

男子島民は更に少ない。佐々木はその希少な戦争体験者の一人である。既に90歳を越しつつあるが、彼の姉である吉田チヤ（父島在住）にも助言を得て疎開前後と制海、制空権も失われた往時の逼迫した島内の様子を語ってもらったことは得難い機会であり、両氏とも度重なる取材に終始快く協力して下さったことに対し、小論をかりて深甚なる感謝の意を表したい。

文 献

- 浅沼悦太郎（1974）『改訂増補三宅島歴史年表附伊豆諸島』島の新聞社，82-84.
- 段木一行（1976）『離島伊豆諸島の歴史』武蔵野郷土史刊行会，274-276.
- 石井通則（1967）『小笠原諸島概史（その一）一日米交渉を中心として一』財団法人小笠原協会，27-28.
- 河合正廣（2000）陸軍の防衛召集制度とその実態について—沖縄における防衛召集—。防衛省防衛研究所戦史部（編），戦史研究年報第3号，43-55.
- 小林亥一（1980）『青ヶ島島史』青ヶ島村役場，523-528.
- 南大東村誌編集委員会（1990）『南大東村誌』南大東村役場，385-388.
- 内閣情報局（1942）防衛召集問答，週報第314号，内閣情報局関係出版物，内閣文庫，国立公文書館アジア歴史資料センター．2-9.
- 小笠原戦友会（1969）『小笠原兵団の最後』原書房，181-191.
- 小笠原諸島強制疎開から50年記録誌編纂委員会（1995）『小笠原諸島強制疎開から50年記録誌』小笠原諸島強制疎開から50年の集い実行委員会，東京都小笠原村．153-159. 179-182.
- 大関栄作（1995）『母島戦争小史』山波企画（有），26-29. 43-56.
- 陸軍省（1944）帝国国力ノ現状，最高戦争指導会議報告，陸軍一般資料，防衛省防衛研究所，国立公文書館アジア歴史資料センター．85-92.
- 陸軍省（1945）決号作戦準備要綱，帝国陸海軍作戦計画大綱，戦争指導重要国策文書，防衛省防衛研究所，国立公文書館アジア歴史資料センター．32-33.
- 副島啓治（1992）『私の陣中日記』工文社，89-165. 163-173.
- 高城重吉・菊池虎彦・饒平名智太郎（1957）『望郷』三光社，101-110. 135-136.
- 東部復員監部（1945）離島部隊（除大島八丈新島部隊）到着状況一覧表（十一月分）東監復第三号昭和20年12月1日．離島部隊到着月報（十一月分）送付ノ件．復員状況月報第1号～第56号．国立公文書館アジア歴史資料センター．167-169.
- 東条英機（1942）陸軍防衛召集規則，陸軍省令第53号．官報第4715号．昭和17年9月

26 日. 大蔵省印刷局. 日本マイクロ写真出版. 国立国会図書館デジタルコレクション. 478-479.

山田平右エ門 (1992) 『八丈島の戦史』 (株) じんのう, 41-43.

山田尚義 (1987) 『さまよう生と死暗黒のはざま・主計下士官父島戦記』 丘書房, 56-58.